

詩

赤い夕日はいつまでも
 静かなその音を聞いてゐた
 鐘はゴンゴン鳴り果てて
 僧はお寺に入つたが
 赤い夕日はいつまでも
 耳かたむけて聞いて
 ゐたやつと氣付いたその時は
 淋しい闇が一面に
 迫るばかりで鐘の音は
 とうのとづくに止んでゐた
 赤い夕日は大變に
 あわてゝ西の山の端を
 次第々々に降りて行つた
 後に残つた寂寞は
 此の世の總てをまつくらな
 夜としてしまつた
 とう／＼夜になつたかと
 鐘は一人でつぶやいた。

七〇

墓参り

我が母はねむる
 この墓の下に
 とこしへに……

宿題

算術が出来ない
 そつと外を見た
 日が
 青白く光つてゐた



追憶



白線の帽羨みしあの頃のいときき姿我なつかしき
 君と言ひて君と言はれし新入の春の樂しさ忘れ難きも

山口彌平

去るに望んで

ねつかれず今宵も思ひを走すかな去にし五年事の多けき
 今になりて思へば長し往來せしこの道戀しこの服戀し
 出でゝ行かば先輩の名にて呼ばる我ノートの名前しみ／＼眺む
 さらでだに涙多けき我なりきとはに去り行く朝ならばや
 遇ひて今日また別るゝかあじきなきとはの契はとはならまほし
 過ぎ行かば夢かとぞ思ふ我が學びの短かし長し五年の春
 強ひられて卒業寫眞撮りたりき我が顔憂しや心あらずも

短歌

七一

言ひたからず言はずは寂し別れ路のさらば告げなん涙はらひて

秋の愁傷

組田重嘉

初秋や黄色き木の葉まれなれど地に敷く錦繁げきぞ侘びし
果てしなき眞澄のみ空青々と高く飛び行く鷹の恨めし
秋來ればすだき忘れぬ虫なれば我も忘れじ學びの道を
名月や屋根の蔭に白々と霜を置きたり青き光は
満月や月見團子に止る蚊に夏の名残ぞうたゝ偲ばる

四季の繖山

キヌガサ

川澄健一

のどかなる日も高くなり繖山鶯鳴きて春は來にけり
木蔭にて汗ふき取らん繖のとなびなきけり山づたいかな
繖の山に登れば晚鐘の悲哀増しけり秋の夕暮
入日をば浴びて紅に映えにけり繖山の雪のむら消え

旅にて

奈良にて

三笠よりながめて心は静まれり昔さかえし奈良の都を
青丹よし奈良の都の手向山管家しのばれ襟正しけり
春霞かゝりてぼんやり古の大佛殿行く鹿のむれ哉

吉野にて

名にし負ふ吉野の山に來て見れば春風吹いて櫻葉の音
友のいふ如意輪堂まであと三町櫻の下道汗にじみ出づ
空晴れぬ校歌歌ひて登り行く櫻ちら／＼三吉野の山

高野にて

春空の晴れて鶯鳴きにけり清水の音して朝高野かな
昨日の疲も忘れて登りけり大和靈場高野の山
和歌浦にて

潮風のひやりと頬を撫で去れば波の音のみ夜の和歌の浦
小波の寄せくる音を耳にしてたはむる岩を眺むる我かな
東雲の空はしらんで曉の海上しづかにかもめのすべる
夕陽の海に映じてたそがれと化して行くなり和歌の浦濱

瀧

河鹿鳴く聲もきこえぬ瀧水の山をもゆるする音のとゞろき
きり削ぎの岩に裂かれし水煙靜かに這ふなり杉の青葉に

吉田穰

木枯に

日夏慈樹

木枯にくるく舞ひてもみぢ葉の散りくる隅に日向ぼこする
すみにゐて日向ぼこせば運動場を落葉卷き上げ木枯の吹く
學び家の銀杏の黄葉散り敷きて梢さみしく秋たけにけり
春出でゝ秋にしなればもみぢする一葉のいのちみじかくもあるか
木枯にふるへて歸る夜の道のぬかるみにうつる月の影かな
夕暮の芹の堤を我行けばすゝきの花の白くあるかな
ぽんと蹴れば澄み渡りたる秋空をめがけてのぼるフットボールかな
起き出づれば熱柿三つ四つなる柿木の梢にかゝる有明の月
月もゐず賣られ難の空雞屋に今日はむなしく秋日照るなり

敵を待つ桑の島の枯草に雞頭の小花咲きつゞりをり
敵に射襲たれて桑の島にかくれけりあの夜は我は斥候なりし
夕寒むし寺の門邊に腰かけて冷たき飯を靜もりて食ふ

(以上三首野外演習)

夕暮れの磯をし行けばひたくと寄せくるなみの靜かなるかな
波やみし水際を行けば長々と我が足跡の續きけるかな
赤々と夕日子ゆれて比叡なる山のあなたにおちゆきにけり
また今宵木枯の吹き出でぬらしいねがてに聞く波の音かな

冬の訪づれ

虫の聲なく夜の夢も覺めはてゝ朝を寒がる冬の訪づれ
汁灰桶をかへせし如き空と湖を見つゝ急げり時雨する夕
桑の畑めぐりて行けば伊吹山頂日の光る初雪
もうこんなにあかぎれせりと母上は火にかざしつゝ手を出したまふ
店先に日記色々並べけり年の暮なりとつくゝ思ふ
うぶすなの宮居の森に朝とく落葉かきにと娘行きけり
田の中を眞すぐに遠くうぶすなの宮居の森に續く道哉
わくらば

もみぢせでしほみて落ちるわくらばの身にもたとへん友の命は
友の身はもはやたゞなくなりけりと思へばさみし秋の夜かな

甲斐なけれど苦しむ友に思ひよらば燈の下に我は祈れり
たらちねとまどひする夜も友の身のいかがあらんと噂し合へり
子を思ふ心に二つなかるらん友が母上の痛み心は
新春に歌留多取らんと百人首を覚えし去年の此頃の友
こすもすは花も散りけりその莖も枯れにき友の植ゑしこすもす

秋八題

清水正義

稻の穂もやゝ色づいて秋らしい田んぼの小屋に鳥が鳴いてる
吹く風にゆらり／＼と動いてるすゝきの穂は眞白になつた
校庭のポプラのかげに野球見る生徒の肩に葉が降りかゝる
露光る朝の野道を登校する友も急いでステーションへ行く
野を走る電車の音におどろいて田んぼの雀がばつと飛びたつ
今日も亦雨が降るかと思つて傘持つて登校をする
電燈の下で本を讀んでるとかまどの隅にこぼろぎがなく
竹をきる頃となつて思ひ出す去年の秋の此頃のこと



雑吟

平野寛

鶯の聲ほがらかなり春日和
みぞれ降る今日の御葬やあな悲し

(久宮内親王の御葬式)

鯉のぼり青葉若葉に風かほる
縁起とく僧老ひにけり法隆寺
青葉道香の煙や二月堂
うねうねと櫻の道や如意輪寺
こほもりの空飛ぶ夕や涼み臺

(日記の中より)

瀧

吉田穰

濡れ色の青葉若葉や瀧の音
夕顔に湯上りの體冷えにけり

秋の美

組田重嘉

汽車走り雀飛び立つ穂波哉
秋祭り森を隔てゝ太鼓聞く
日は落ちて餘光に映ゆる梢哉

雑詠

川澄健一

魚釣りも今をさかりの春うらゝ
春雨もしとやかに降り梅の露

しひ拾ふ子等の集る木蔭かな
書物をばひら／＼させて汽車の窓
雨上り緑色増すあひる鳴く
又一つ柿の落ちけり秋の暮

俳句三題

寛 登

木枯や荒涼の野を後にして
野分して山のすそのや栗のいが
雨晴れて傘干す庭の落葉哉

夏休み(川柳)

久米 孝男
宿題と胃病が残る夏休み



旅行記

悠紀齋田拜觀の記

川 澄 健一

今日は悠紀齋田拜觀の日だと思ふと、自ら心が緊張するのであつた。空は曇つてゐる。不安を抱きながら、我等全校生徒は、おさへ切れぬ喜びを面に表して、彦根驛を出發したのが午前七時三十四分。

汽車が大上川を通過した時、遂に雨が降り出し、それがだん／＼と強さを増して行つた。窓硝子も曇つて、近くの山さへ見えない。「今日は一日雨だぞ。」あちらこちらで話聲がする。一時間あまりして野洲驛に着いた。急に齋田といふ名を思ひ出して、身のしまるを覺えた。雨は止まない。

驛に向つた。十二時半には無限の感激を胸に秘めて、再び汽車中の人となつた。

第四學年修學旅行記

家 森 武 夫

第一日

「旅行々々」僕は口の中で何度も云つてみた。

「歡喜!! 愉快!!」等憧憬に満ちた言葉が、次から次へと連想せられた。あゝ楽しい旅行の途についたのだ。

午前五時!! と云ふと未だ少し暗い。汽車はこの薄明るい中を、楽しい夢路をたどる様に、ゆるやかに「ゴトン／＼」と音をたてながら走つてゐる。

京都を過ぎた。山城の平野だ。茶畑の中を走る。宇治川を渡る。木津川を渡る。山もこえた、川も渡つた。さうして春のうら／＼かな眞晝の中を走つた。

法隆寺

晝前奈良についた。直ぐ法隆寺驛へ行く。驛より法隆寺まで約二十町、青田の中を通ずる道を通つて法隆寺へ向つた。

「癪だなあ。」思はず人々の口から洩れる。しばらくして小降りになつた。我等は雨中の行軍をして、齋田へと進んで行く。老婆が合羽をまとふて、よろけながらも齋田拜觀の道にいそいでゐるのが目につく。顔は緊張し切つてゐる。多くの團體が長蛇の様にうね／＼ねつてゐるのも面白い。二十町ばかりで、榮ある御上神社の境内に入つた。

神代に生れて來たかと疑はれる程の神々しさ、しづけさを破るおごそかな太鼓の音。それと調子を合して歌ふ早乙女の朗らかな聲。次第に身は愈々しまる。やがて參拜も終へ、齋田拜觀といふ事になつた。多くの警官が穴のあく程、じろじろ、とまじろぎもせず、拜觀者を見つめて立つてゐる。この時から運悪く又雨が烈しくなり、耳そばだてて聞く齋田に關する説明もどうかすると聞き落しがちになつて來た。あゝ憎らしいことだ。人々の残念さうな顔、青竹の垣めぐらしたる齋田の稻穂は金色の波をたてゐる。

自分は今齋田を拜觀してゐるのだ、と思ふと夢の様な氣がして、自分自らを忘れる。雨の小降りになつたころ拜觀も終つた。四五人の友と最寄の御寺の縁をかりて晝食をとる。少し休んだ後、ぶら／＼と砂利のひいた、歩きにくい道を野洲

本當にいい天氣だ。

大和の平野の一角に立つて一千年の昔のありし姿を偲んで隆盛なりし平城京の名残を目の前に見ながら、古き御堂へと吸付けられて行つた。法隆寺、それは日本の古代文化を物語つてゐる唯一の建築だ。天平文化はこの奥ゆかしい御堂に秘められてゐるのである。一千年も昔の御堂が、そのかみの藝術を語り、文明を語り、歴史を物語つてゐるのである。

自分は熱心に見まはつた。さうして熱心に……光るものを探し求めた。一千百年前の彼所の御堂の影に。又此所の松の木蔭にと。

白き日のかげろひ照り、まぼろし青く彼處に見ゆる、詩の國、夢の國、宗教の國を……自分は藝術を求めて、かの文明の跡を求めて、憲法十七條、民を導びき給ひしかの太子を求めて、探しまけつた。

嗚呼、神秘と、かみさびた感を残しながら、法隆寺見學を終へ、午後の日の輝いてゐる奈良へ再び歸つた。

奈良

奈良驛頭に整列して猿澤の池畔なる旅館に向つた。旅館にて小憩後、五時迄市中の自由見學を許された。

春日を訪れた。さうして一日中歩きまわつた。

五時に、皆旅館に歸つた。夜が訪れた。猿澤の池に電燈の光がさゞめいてゐる。旅行の第一日も暮れた。

やがて三笠の山に月が出る頃、阿部仲磨呂の味も思ひ出された。さうして、

春さり行かば青によし

奈良の都に尋ね入り、

としつき君かこひしたふ

御堂のうちに遊ぶとき

ふるき藝術の花の香の

伽藍の壁にのこりなば、

と藤村の詩も思ひ出される。

第二日

若原文五平

南都の夜は靜かに明け、旅の第二日は歡喜と共に訪れた。皆は早曉から曉のはれた青白い顔洗面所に突合して昨夜の不睡眠を中心に雑談に花を咲かせてゐる。

宿を出て暫時猿澤池畔を逍遙する。朝霧靄々たる池の面、

昔金色の爪を閃かせて十丈あまりの黒龍が天上したと傳へられてゐる猿澤の池は、緑したる柳の糸を池畔に宿し、興福寺の塔を倒に寫してゐる。向ふの岸には市制……三十年と書いた「ぼんぼり」が立つてゐる。

南圓堂を左に見て通り、東大寺に詣でた。

何時見ても大きいには變りないが、再びこの大佛の大きさに驚いた。次に二月堂三月堂を拜して若草山に登つた。

帝室博物館奈良ホテル等の建物——春日神社や興福寺等の伽藍が、猿澤の池をとりまいた茂みの中に見える。

「三時だ」春の日は未だ未だ暮れない。

次に私は限りなく晴れた空と今ふき出したばかりと思はれる様な淺葱色の野原とを見た。

そこは幾百人幾千人の人々が月をみて歌ひ、花を見て歌ひ物にふれをりにつけて歌つた所である。

詩の國とは、こんな所をいふのだらう。

自分の見る何物も歌つてゐる……大宮人の櫻かざし紅葉かざして往來してゐた……その奈都の都の美しい景色に恍惚たらざるを得なかつた。

奈良は鹿が多い市中の何處を歩いても鹿ばかりだ。

垂柳靡かざる無風の下、岩上に曉夢を結べる龜の群、總て此れ南都の靜寂をシンボルしてゐる。

旭日高く昇つて、神鹿市街に現れた頃、魅するやうや興福寺の塔に深き愛着を感じながら、奈良を去つて畝傍へ向ふ。汽車は山を巡り、野を走り、森を抜けて疾走すること約一時間餘り畝傍へ着いた。驛から歩むこと約半町神武天皇御陵に額づく。更に徒歩橿原神宮に參る。噫是れ此の地皇發祥の地なりと思へば自ら敬虔の念禁じ難いものがある。神宮を辭して直に神宮前驛から電車にて吉野に向ふ。時に午前九時五十分。電車は或は速く、或は遅く、車窓に現滅する丘陵、田畑人家、社寺目を樂しましめるもの少くない。漸く吉野に着く一同山麓の茶店で晝食。其れから自由登山。兩側の土産物店から頻りに呼ぶ聲が聞える。

やがて仁王門をくぐれば忽ち右手に藏王堂がある。堂前四本の櫻樹の綠滴るばかりなのも懷舊の涙にうるほふかとあやしまれる。しばらくして四顧綠翠の境に入る。「これは——とばかり花の吉野山」といふ句は今眼前に味ふことは出来ないが、所々に残るボンボリに春の名残を留めて華やかである。羊腸の坂路は何時盡きるやら、先發隊の叫びは綠雲をもれて

第三日

茶木伊三郎

遙か上から聞えてくる。もう良い加減に何處かへ辿り着けさうなものだと思つてゐると、向ふから數人友達が引返して來た。問へば直ぐ其處が如意輪寺ださうな。急ぎ足で寺に着く香烟は縷々として紫に煙つてゐる。堂後松柏陰森たる所は後醍醐帝陵である。暫時陵前に額づいて暗涙にむせぶ。下山の途に就けば登山の苦に反し談笑の間に吉水神社についた。流暢な而し故意とらしい處なまりを混へた可笑しい説明によつて寶物を拜觀し更に途中義光の墓、吉野神宮を拜して山麓の吉野口驛に着いた。待つこと半時間皆集合した。

今や終らんとする第二日の旅を惜しみつゝ吉野川を後に見て橋本に向ふ。やがて淋しい田舎町についた。此處が橋本である。竹屋旅館の薄暗い二階へ入れられた時、一同狐にでも欺されたやう「なんだ／＼」と歎息する。

然し驚ろいた事には、紀ノ川の清流が直ぐ眼下に眺められる。氣の早いものは既に川畔に下りてゐる。

此の田舎町は何時の間にか夜の帳に蔽はれてゐた。旅の疲を醫する爲茶話會が開かれた。歌ふ者あり、囁く者あり、談ずる者あり、辯ずる者あり、滿堂捧腹絶倒和氣霽々裡に閉會した。床に就くと疲勞一時に襲ひ來て翌朝迄ぐすりねこんだ。

宿屋の眞裏の紀の川の水音に一同楽しい夢を破られてすとはばかりにはね起きた。各自でんでに紀の川のほとりく行つて顔を洗ふ。朝の涼氣があたりに満ちて身も心も引きしめる實に朝は世間も靜かで心地がよい。今日は目ざす高野登山だ一同荷物は竹屋旅館に預けて置いて午前六時半橋本驛に集合した。午前六時四十六分一同は早や車中の人となつた。電車は赤土の丘陵地を搖れて行つた。段々になつた畑で大抵は麥が植ゑられてゐる。電車は無心に丘陵地或は野道を走つた。學文路九度山等見る／＼電車は數多の驛を突破して進んでゆく。九度山と聞けばあゝあの昔豊臣の軍師と歌はれた眞田公の隱居の地だ。我々はありし昔の幸村公を偲びつゝうつとりとしてゐる。はや何時しか高野下についたそらと一同電車を捨てた。かなり山奥へ入り込んでゐる様だ。川沿に並び建つてゐる家々の中にはそれ／＼高野の名物なり力杖を賣つてゐる店ばかりだ。一本五錢か六錢の杖を求め進む。此れからだ一同の元氣は溢れてゐる。徑は傾斜の急な山の肌を曲りくねつて非常な坂である。時々ケーブルカーの音が頭上に聞える道の兩側には色々の不具者が見るあはれな姿をして登山參詣

者の恵を乞ふてゐる。見るもいやらしい。然し私は彼等の不幸な身の上に對し心から同情の涙をそ／＼がざるを得ない。一錢與へ。二錢與へ。山に登りきる迄には廿錢位はくれてやつたらう。この様なみじめな者があるかと思へば一方昔の乗物の様な物に乗り二人の工夫にかかせて他力で、いや金の力で高野山詣をするものもある。世の中はまち／＼だこんな王合で此の邊は一二世紀昔の様な氣がする。大分疲れを覺えた。而し青年の誇で以て尙歩速を早めて上る。此のあたりは大檜がしんしんと空に聳えて何千年かの物語を交しゐる。全身をうるほす汗も山水にひんやりとして來て心地がよい。眞言宗の靈山だけに幽玄な氣があふれてゐる。一同物をも言はずにぐん／＼登り續けたかと思へばはや苦しさに絶え兼ねて不平を鳴らすものもある。然し元氣を取り直して進み一同豫定以上に速く女人堂についた。海拔三千尺と云はれてゐる。然し我々は少しもそんな氣はしない。一同「記念スタンプ」をおした。此處で小憩して福智院に到着。一同此處で晝食をすませた。江州から行くものは誰も此の福智院で休憩する事になつてゐるらしい。

やがて一同打揃つて福智院を出で案内の小僧に導かれて綠

色濃き杉松の間を通り、或は打列べる名物店の前を通つて刈萱堂に來た。かの刈萱道心父子の哀れな物語を偲べば又一條の涙を催さざるを得なかつた。名残は惜しいが袖を拂うて奥の院へと向つた。樹木鬱蒼たる中を一同石疊をふんで黙々として歩を進める。暫く行くと大名小名の墓が兩側に現はれた進むに隨ひその數は増すばかり、右顧左眎案内小僧の説明もよく耳には入らぬ。ただ／＼海拔三千尺の山上に此の幽玄壯大な大規模の仕組に驚嘆しながら進む。途中我が彦根城主井伊家の廟を道の左に得た。或は石田三成の墓或は豊臣一族の墓或は加賀前田公の墓と通り過ぎとう／＼御廟橋を過ぎ石段を上り奥の院に參拜。遠く昔の偉人學者宗教家でも藝術家だつた弘法大師の事蹟を回想しながら、長者の萬燈貧者の一燈といふお堂を拜觀した。ただ我々はあたりの幽玄とそして底しれぬ魅力を有する此の奥の院を二三の友と打仰いてしばらく冥想に耽つた。自由解散と聞いて一同思ひ／＼に姿を消した。自分は尙二三の友と打連立つて大木松古杉鬱蒼たる中を通つて眞言宗の總本山金剛峰寺に參拜する。案内者に乞うて寺内を拜觀する。狩野探幽等諸名手の畫等數多の古名畫に接し、其の運筆の妙に深く興じ、又豊臣秀次切腹の間なる柳

第四日

組田重嘉

の間を見て、又一入の感に打たれ心を残しながら金堂のありし跡に出た。一同思ひ／＼に山を降り始めた。今はもうつかれきつて足の運びも機械的だ。日も大分傾いた。一同下山終つて再び高野下驛に集合し午後三時半又も車中の人となり同三時五十分橋本に着き、四時二十分橋本を後にして一路和歌山へと向つた。午後五時五十分和歌山市に下車直ちに市内電車を目ざす和歌の浦へと向つた。先づ此の地で第一に目につくのは御城だ。うつとりとして故郷彦根の金龜城を思ふた。實になつかしい彦根を大きくした様な町だ。夕方近く一同と／＼目ざす新和歌の浦に來た。實に天下の絶景だ。今迄山又山と山ばかり歩んだ我々は一入海といふものに興味を持つた。いや懐しかつた。先づ萬波樓に宿をとり一同思ひ／＼に戸外に出る。遙か海の沖合からは漁船らしいものが歸つて來る。あたりが暗くなると思ふと月はほがらかに東の空に昇り始めた。一同は夕飯をすませて十時頃迄はまた町に走る者、或は海邊をさすらふ者等思ひ／＼に楽しく打興じた。もう十時だ大分疲が出て睡氣を催す。今夜はぐつすりね込んで明日の旅行を續けるとしよう。

を出て海岸傳ひに歩いた。由良の海峡を通る帆船が朝風を孕んであちらこちらに點在してゐる。海岸で美しい貝をひろつたりして一時間程遊んで集つた。和歌山市電で紀三井寺へ行つた。

ふるさとはる／＼ここにきみいでら

はなのみやこもちかくなるらん

の御詠歌で有名な西國二番の御札所だ。石段の澤山ある事やその他大津の三井寺によく似てゐる。ラムネやサイダーで渴を癒しながら和歌浦や新和歌浦の繪か詩の様な美しいとも壯麗とも雄大とも何とも形容のつかぬ絶景に漸次我を忘れた。空はすつかりと晴れ渡り白帆が水平線に見え海は靜かで波一つなく晩春の暖かさがあらゆる物の上に蔽ひかゝつて薄いグリーン刷毛で書いた様に眠つてゐる。長い石段を下りて山門をくぐつた時、門の下で不具な人が坐つて物乞ひをしてゐた。すると今まで忘れてゐた高野山の癪病患者を思ひ出して胸が悪くなつた。停留場で漸く待つて電車で和歌山市へ行きいよ／＼南海電車の大きなボギー車に心持よく揺られながら大阪灣に沿つて走つた。春霞の彼方に淨路島がほのかに見えてゐるのも懐しかつた。神戸、須磨、明石の勝地は水平線

高野山行で疲れてぐつすり寢こんでゐたが、不圖眼を醒ました時には當地方第一と言はれ電車の中にも廣告してあつた大旅館萬波樓の二階には、紀伊水道から吹いて來る清淨な新鮮な朝風が氣持よく頬を撫で、海岸の朝の榮光は今日の一日の旅路を祝福するが如く部屋中に満ち満ちてゐた。限りなき期待と憧憬の焦點だつた旅行も、四日目となると些か倦怠と疲勞を感じる様になる。殊に昨日高野詣りで坂道を五六里も歩いたので——老人ならばとにかくも僕達青年にはたとへそれが天下の靈場であらうとも少しも興味効果を覺えないので尙更疲れた譯がつたのだが——足が痛く頭もぼんやりとし寝足らぬ夢の尾を曳いてゐる様な氣がする。然しこの二階の欄干にもたれかゝつて眺めてゐる和歌浦の言語に絶した美しい景色と、今日は大阪に行けるのだといふ嬉れしさで、重くらしい氣分は夕立景が去る様に散つて行つて仕舞ひ、海岸の岩の上で歌つたり眺望臺に上つて景色を見たりした散歩の後には全くはしやぎ切つてゐた。海岸の美しい清らかな空氣を吸つて散歩した後を取つた朝食の美味さは頗る落ちん許りだ朝食を終へて九時に電車驛に集まればよいのでブラ／＼と宿

の彼方だらう。電車は勢よく走り岸和田を過ぎテニス大會の行はれる濱寺を過ぎ堺に到着した。此所で下車して水族館を見た。名も知らぬ澤山な不思議な色や形をした魚がゐた。館の外に有つた鯨の骨の大きいのは目を見張つて驚ろいた。琵琶湖を走る小さな汽船より大きい位だ。さすがは海の王者だと感心した。見物後直ちに驛へ行つた。昔を回顧して見ればこの堺の町は一時は港市として榮えてゐた。だが今ではあの墨色に濁つた水に僅かの帆船を浮べてゐるに過ぎない。甚だ今昔の感が深い。

再び電車中の人となり大阪郊外を走つた。此の邊まで來ると大工場が多く煙突が林立して大工業地帯を明に見せつけてゐる。電車は遂に難波驛に着いた。

驛の構内より一步外に出ると、其處には大大阪のあらゆる文明が大車輪で廻轉してゐる。都會人を都會人たらしめた交通機關はめまぐるしい勢で大活動をしてゐる。圓タクはヘツトライトが前の自動車につかればかりに縋るが如く走つて居り、電車の軋る音はあちらにもこちらにも撥音を醸じてゐる直ちに宿所の旅館へ行つた。心齋橋の側だ。道頓堀が近いのは有難い。荷物を置いて日本橋通りをぞろ／＼歩いて天王寺

まで行つて開散、自由に宿屋へ歸つた。

夕食後の大阪の漫步、それが最も楽しい時だつたのだ。先づ行つたのは道頓堀だ。其處に並んだ多くの活動寫眞館松竹朝日、敷島……は都會人に一夜の享樂を與へ、シネマに依つて人々の心に様々の思ひを畫かしめ、邪惡に満ちた都會の生活の塵界を解脱して、楽しい別天地に遊ばしめる所だ。だがうそかほんとうかは知らない。奇抜な看板が癖風の様に並んでゐる。高く聳えてゐる赤や青のイルミネーション。青い燈のもれるカフェーから聞える「道頓堀行進曲」のリズム。ジャズの響き。享樂の管絃樂は盛に奏でられてゐる。都會情緒の交響樂は到る所に渦を卷いて急速度で廻轉してゐる。ソロモンの榮華であるかも知れない此の都會人の空虚な享樂は不夜城の大大阪に夜の明けるまで續けられてゐる。千日前、新世界等へ行つたが、不景氣の風は日本の何處に吹いてゐるのだと嘲笑し冷笑してゐるかの様に明るい美しい電燈で眞晝の様に照らされてゐる。屢々田舎に在りて田園生活を營む人が都會の華麗な生活を憶れるのはこのたゞ表面のみに現はれた都會の美しさなのだ。彼等が如何に忙しく機械的に數理的に働き農園生活を憶れてゐるかを知らないのだ。貧民窟の人

達を知らないのだ。パンを得るに窮々としてゐる人の多きを知らないのだ。食物を取らずとも衣服を飾りたがる自分に困つてゐる彼等である事を知らないのだ。他から華やかに思はれる生活にして幸福なるものがあらうか。自己に與へられた天職に満足し得る人が世界中で一番偉い人ではなからうか。一番強い人ではなからうか。——私は大丸のバルコニーから大阪の夜景を大觀しながらこんな事を考へた。

十一時に點檢を受けて床に入り、松竹から聞える音樂を子守歌に眠らうとしたが、小さな頭の中に今まで四日間の旅行のすべてが走馬燈の様に眼の邊りに現れては消え、消えては現れて、頭は空虚の様になり激しく痛んでも、目許りは冴えてこの旅行最後の夢はなか／＼結べない。

第五日

川 澄 健 一

待ちに待つた楽しい旅行も今日限りで終るのだと思ふと何んだか物足りない様な氣がした。今日こそはうんと赤毛布を發揮しようと心に誓ふ。今日も幸に日本晴だ。クリスチャンチやないが旅行出發の前晩は「天よ!!我々の旅行中に幸福あらせ給へ」幾度か懇願した事だつた。この至誠が天に通じたの

かも知れぬ。昨夜のおそ寢も皆のまぶたで知られた。

午前八時半、先生の號令一下我々は毎日の疲れをも見せず宿を出て、大阪全市の人氣を集めてゐるあの古い歴史を持つた大阪城に行つた。電氣人形の様な番兵に、その黒光つた目でじろ／＼にらみつけられながらだん／＼天守閣へと上つて行く。日は錫色の空に遮ぎられてぼんやりと、光を放つてゐる。けどのどかだ。空堀の草も青々としてゐる。先づ我等は巨大な石もて造られてゐることに驚かされる。歴史の挿畫にあつた秀吉の顔が目前に現れて来る。

夏草やつはものどもが夢の跡

その句と情趣が一致してゐて、始めてその句を味ふ事が出来たやうな氣がする。汗びつしよりやつと天守閣に上つた。そして全大阪市を見下した時は頭からぎゅつとおさへつけられる様に思はれた。大朝社、大毎社、デパート、府廳舎等々眼下に展開せられた。又黒煙でうす墨色に染められた天を見ては思はず「あつ」と叫んだ。たしかに緑しづかな金龜城とは遙に趣を異にしてゐる。十時この大大阪市の深い／＼インスピレーションを胸に刻み込んで城を下りた。これより午後二時までは自由行動を許されたのを幸四五人の友と、吉野で買つ

た櫻の杖を振り廻し、金ボタン光らせて中之島ブラをやつたモガモガがすまして歩いてゐる。かと思へば木陰のベンチに腰かけて、親しく語り合つてゐる。側を流れてゐる、泥でも溶かした様に見える淀の支流を蒸氣船がやかましくせきたてるやうに上つて行くのも面白い。日は益々あつくなつて來た一大怪物難波橋を渡り、埃まみれになつてやつとついたのが三越の食堂。……

X

三十分時した後、三越をさん／＼見廻つて又ぶら／＼と大朝社の方へ歩いた。自動車!! 自動車!! 電車!! 電車!! 自轉車!! 自轉車!! 走る。走る。目がまわる程。何所からか、道頓堀行進曲「赤い灯、青い灯」が洩れて來る午後二時大朝社前で造幣局見學の友と一緒に、一同勢揃ひして、新聞製造を見學することとなつた。しばらく休憩してから工場には入る。

約二千人餘りの社員、職工が汗みどろになつて、働いてゐる。各種各様の活字は何千萬となく工場のケースに並んでゐる。そしてそれが電光石火的に組まれ、紙型となり、鉛版となり、輪轉機に取りつけられ、恐ろしいスピードをもつて印

刷され、綺麗に四つに折疊まれて出て来る。この有様を見た時は自分は今の人が、はた古の人かと思ふまで、我を忘れて餘念なく見入った。案内者の一言一句も聞き落さぬ様にして廻つて行く。一日に發行する新聞は積めば、富士山より二百米ばかり高くなります。凡そ一分間に五千枚出来ます。」といつてた事を記憶してゐる。我々一行は魔術にでもかけられた様にぐるぐるあたりを見廻しては、たゞ驚嘆の眼を見張るばかりであつた。三時、やがて見學も終つた。又ぶら／＼歩いて梅田驛に來た。さあ、これで旅行も終つたんだ。愈々金龜城下に歸るんだ。と思へば嬉しい様な物淋しい様な感じに打たれた。

四時二十八分汽車に乗つた。辨當々々、ビールで宗サイダ、と賣り子の馴れた口調、新聞々々、あゝ新聞だ、まだインキの香が鼻についてゐる。汽車は出發した。

おう大阪よ!! 憧れの都よ 我は去るんだ

みどりしづかな金龜城下へ

おう煙の都よ 我は歸るんだ 稻の田舎へ

窓より首を出して、はなれ行く大阪市に幾度か別れる告げた今日の見學の事をしみ／＼とおもひ返へしてその新聞を有難

て目覺みしめ、讀經の響は目覺めたる心に力を與へ、更に木魚の音によつて與へられたる力は鼓舞せらる。此の興趣多き海邊の空氣を思ふがまゝに呼吸し、物さびたる鐘韻、木魚の音を聞いて、一同生氣潑刺快の氣に充ち満ちぬ。

六時四十三分、天橋發中舞鶴に向ふ。途中豫定を變更し新舞鶴に下車直ちに徒歩にて要港に向ふ。立並ぶ家屋はさのみ立派とはいひ得ざるも、小綺麗にて街路井然たるところわが彦根町と趣を異にし、晴やかなる氣分の町なり。廣い道路を行くこと數十町、程なく要港門前に着く。

少憩の後、門内に入る。大通りを行くこと數町二本のマスとと二本の煙突とを見る。

「軍艦だ!!」一同は躍る胸をおさへて、マストと煙突とを見つめながら、なほ數町の道をたどりて、港内を一望に收め得る處に至れり。眼前には吾妻艦悠然とその巨軀を横へたり。港内の堪々たる水はこれ帝國の護り數隻を浮べて頼もし。向ふの作業場より響き來る鐵槌の音には無限の力のこもるをおぼゆ。

吾妻艦に乗込む。甲板上艦長及び一將校の説明を聞く。艦は日露戰爭に出征し、第一線に立つて目覺しき偉勳を立てた

度く讀んだ。かくして午後七時まさに夜のとはりの下りようとする時無事一行は歸彦したのだつた。

第二學年修學旅行記

水 波 淳

十九 日

昨日は旅行の第一日只愉快／＼と喜ぶ中に暮れ去つた。

黎明は夢の旅路の枕邊に訪れて楽しい宿の一夜は將に明離れんとす。午前四時半、出でて諸近くに立てば海は寂然として唯靜かな天地に聞ゆるは朝の爽かな空氣を震して聞ゆる海鳥の聲のみ。天空に煌く星影は地上に映じて朝靄の中に輝く淡い燈となり、天橋の松は成相山近くまで塔列し恰も蒼龍の江を渡るが如し。

やがて東山の頂は明けそめたり。世界は暗黒より光明へと進む。木は目覺めて綠色に滿ち、空は目覺めて青く、海は目覺めて澄み、人は眠を離れてまさに働かんとするなり。

近く文珠寺の鐘海邊の空氣を撼して、一つ又一つ讀經の聲は木魚の音と和す鐘の音は眠れる人心に、刺戟を與へ人をし

るも今は豫備艦編入せられたりと。

艦内を一巡す。構造の精巧、形態威力の大なるに驚嘆す。特に日露戰爭當時に受けたる彈痕及び悲惨なる敵彈の損害を撮影せる寫眞を見るを得て、此の艦の日本海の白波を蹴つて活躍せる當時の勇壯なりし姿を偲べり。

吾妻艦を辭して海軍機關學校を訪ひ校内を一巡す。バラツク式の假校舎なるも設備よく整ひ、校内亦よく整頓せられをり、同校の一室を備りて晝食をなす。

一時三十五分中舞鶴發の列車にて歸途に着く。昨日まで憧れし丹後の山海も唯二日の樂しき夢とすぎ、車窓はるかに消え行くはいと名残おしまる。汽車は若狹灣近くの山野を走るこのあたりトンネル多し。紺碧を堪えたる海は遠くに見え、近くに現る。車中には昨夜の睡眠不足の爲路と夢を辿る者もあるなり。

四時十七分、敦賀着。約四十分間プラットホームに休憩す汽車辨の配給あり。一同舌鼓を打つ。五時五分明石行の汽車に乗る。

柳ヶ瀬のトンネルを通過する頃日はいつしか西山に入りて暮色蒼然洲國の天地を包む。米原を過ぎ再びトンネルを出て

わが金龜城の夕靄に包まれて我等を迎ふるを喜ぶ。
午後七時十九分、無事二日の旅行を終へて彦根着。驛前に
て解散各自が家路に急ぐ。
(終り)

養老への旅

種村儀平

七月二十七日の朝ぼらけ、露滋き野路を中仙道へと志す。
養老に行かんとてなり。

一行十人、皆學校にて借用せし天幕を持てり。天幕旅行を
計畫したるなり。

中仙道に出て第一に目につきしは、路傍に居並ぶ老松な
り。年経たるもの趣あり。

鳥居本をすぎて、鷹針峠に到る。鬱蒼たる山路。坂は急峻
なれど、短かければさして苦しからず。頂上に上りて、神前
に憩ふ。眺いと好し。大いなる神木の木影に腰を下して早や
辨當の包みを解く者あり。

此所を立ちて山路をわけ、番場に入りぬ。長い街並。

醒ヶ井の清き水の湧く所——加茂の社に杖を止めて書餉の

明くれば二十八日。

昨夜少しく降りにし雨の、あとなく霽れて、我等の旅を祝
福するが如し。七時此所を立ちて、養老路に入る。長き野路
遙けき山路。昨晚の睡眠不足の爲にや、歩調極めて鈍く、午
近き頃養老に到着せり。別荘、公園等を素通りして、涼しき
瀧の邊に到る。瀧は思ひし程も大ならず。今春日光に遊びて
華嚴を訪れし我等は壯觀を感ずること能はざりき。

それより二時間の後、吾等は養老山脈(?)の上にあり。

眺望頗る宜しく、低回する能はず。

頂上を辭して降らんとす。せゝらぎ先づ聞え、尺餘の小川
を發見す。玉水を換して渴をいやし細き道を進む。

漸く歩を移せば、雜草深くして身を没するに至る。それを
分け、岩根を飛び越えて流れを横切り、山の端に出づ。初め
の程はあの山を越えなば必ず人里に出づべしと思ひて、勇み
立ちて急ぎしも、求むる所には出でず、進むに伴ひて途益々
険しく、草愈々深く、立ちて歩行することかなひ難く、果て
は進むべき途さへ分らずなりぬ。

憂ふべし。此山中にて路を失ひたる事を。麓の茶屋にて止
めしに血氣の勇の振ひて此所まで來りしを恨むべし。食物の

筵を敷きぬ。

正に陽、中天にかゝりて、暑き事この上もなし。今歩かば
悪しかりなと思ひて休憩をなす。午後三時相伴ひて道を急
ぐ。沿道の櫻の茂みを搖がせて涼しき風我頬を撫づ。

柏原の長き美しき町に着きぬ。

小川關趾を越え所謂寢物語りをすぎ、不破の關屋をたづね
しも得られず。早や關原に達せり。仰げは日既に傾きぬ。少
憩の後、勞れし身を挺して長き野路を辿る。

夏の日漸く落ちて、月出でぬ。其の光は皓々として、敗殘
の古戦場を照し出しぬ。路傍の千草、夏草の葉末に宿りて、
怪しく光るは露か、恨みを含む破れ武者が涙か。此所に十幾
里歩み來りし我等、月下に佇みて何をか囁かん。

かくて八時頃、とある部落に到りぬ。こゝの神社に宿らんとす。先づ水を求めて皆々にすゝめ松の葉がくれに照る月光を頼りに天幕係を鼓舞して、天幕を張りぬ。炊事を終て夕食を取りしは九時すぎなるべし。

後。窓前に佇む月光を背にして寢に就かんとせり。然れ共蚊軍の襲來を如何せん。或は外に出でて月下を逍遙し、或は蚊を追ひ出し、或は忍びやかに談笑して殆ど寝ぬる能はざりき

用意はあれど、傾く夕日、逼る山氣の淋しさを如何せん。又山路に惑ひ、行き疲れて山中に寝ねん事の如何程心淋しき。又、其處にてまどろみし夢の如何に儚き。我等は大いにあせり出しぬ。辛じて探し當てゝそを辿る。然れども途は前に彌増して危く、草木は一入凄味を加へぬ。

我が脚の岩角に傷きて、ズボンは紅に染め共知らず。薦に足を取られて幾度か倒れたり。かゝりし程に、人の焚火せし趾を發見せり。又炭焼小屋を見付けたり。我等の喜び何物に譬へん。

心細さはやゝ去りぬれど、恨むらくは日早や傾きぬ。村雨さへ時々降りたり。あゝ加ふるに、淋しき蜩の音さへ聞えぬやがて暮れ近く西天を望み、重疊たる山岳を眺むるは決して心安きものにあらず。されど如何にもして人里に着かばやと思ひて漸く廣くなりし路を急げり。

山又山。裾を奔り、頂を越えて、終に田園を遠望せり。微かに灯の見ゆるは人里にや。

暮色既に至りて四方暗く、人里に近き秋葉の社に一夜の宿を求めぬ。曾々大雨あり。疲れ果てたる身に半煮の飯を食ふ秋葉神社の宵——。

雨のはれ間に木立より洩れ来る月影に守られて夢路に入らんとす。思ひは今日の山路に到り、運命の神の手にあやつられて迷ひに迷ひし我等は、今や神の試練を経て、その胸裡に眠れり。眞に是れ冒険の後の愉快さ……。

雨切りに降りて秋葉の宮の夜は更けぬ。

秋葉の宮居に鳴く朝の蜩に旅夢の夢は破られて二十九日の日は明けぬ。

劈頭——社を辭して上多良と言ふ所に到る。朝食前に山を越えんとするなり。思ふにこれ鈴鹿山脈の一部なるべし。山高けれど路極めて平坦なり。見仰ぐる山々いと遙かなり。空腹を抱きての山越えの苦しさ。蟻の歩みに似たる我が喘ぎ。九時頃。峠を下り盡せる所に社あり。こゝに留まりて朝食を取らんとす。先づ木々の間を分けて薪を拾ひ、御手洗水に米を炊きて之を煮、神前にて食事す。

少憩の後時山に向ふ。その沿道には奇景多し。或は瀧のかゝれるあり。或は青潭藍に染む流あり。發電所の如きものあり。清水より吹き上ぐる涼しき風は我等に好き休息所を與へたり。正午過ぎ時山の里に辿り着きぬ。此所を越ゆれば早や志賀の國なり。

伊吹登山

和田 孝 夫

八月十四日夜我が親しき友と伊吹登山を決行す。山嶺に達する頃地平線上太陽の出づるを見る。

濛々たる下町は種々に變化し、混沌となり、朦朧と玲瓏となり、紅旭半輪地平を出づれば、人間町の雲烟忽ちに破れ、爽快言ふ可からず。

五尺の身伊吹山に立てば海拔四千五百五十尺の眺望なり。東西南北無數の峰巒は波濤の如く、子孫の如く、低く小く、恰も盆中の假山に似、一帯の姉川は布を晒すが如し、手を伸せばとゞかんと思はるゝ一泓の碧瑠璃は、琵琶の大湖にして竹生、多景の諸島水上に浮び、大小の船舶布帆、漁舟の動靜

皆數ふ可し。湖西に連なるは兩丹の山々、湖南に聳ゆるは、比良、比叡の友峰なり。眼を轉じて、東北を望めば、二濃三越の山嶽、近くは濃く、遠くは淡く、宛然一幅の圖畫に似たり。

青芝の茵に坐し盛夏の澄める大空を眺め清鮮の大氣を呼吸すればその味、かの不老不死の靈氣にも劣らじと覺ゆ。地には草花笑ひ蝶其の間を飛び、樹間には鳥歌ひ、蜂躍る、壯快なる哉。

かくて下山すれば流石に身体疲るゝ事綿の如し。(終)

白鷺城に登りて

平 野 寛

姫路の町は城下町であつたが今は割合ひらけてゐる。白いほこりの立つ町角を二三度曲つて姫山公園に出る城はこの姫山公園の中心に聳えてゐるのだ。櫻の立ち並んだ道を進むと登り口に至る。登閣券を買ふ「マツチ等はお持ちにならない様」に「と番人が云ふ。坂道は比較的急で石と石の間がコンクリートでかためてある。多分後世工事を施したものだらう。少しえらくなる。ふと見上げると其處はもう本丸の入口であ

つた六十の坂を越えた老人が小さい腰掛にかかつて新聞を讀んでゐたが急に立つて下駄札をくれた。此處で下駄と草履とはきかへるのだ。高いしきみをまたいで中に入る壁土の香がする。割合くらしいものである。すりべりした古い階段を登る。また一まがりしてまた他の階段を登る。いくつか登つてとう／＼天守閣についた。此處の城は七層であるから六つ階段があつたわけだ。天守閣には觀光の人々もたくさん登つてゐる。四方の窓からは涼風が心持よく訪れる。

南の窓をのぞくと正午の日は立ち並んでゐる瓦屋根をまぶしく照してゐる。

眼下に姫路第十師團の廣い聯兵場がひろげられてゐる。遠方に瀬戸内海の碧波が望まれる。濱近くに煙突の立ち並んでゐるのは飾磨港である。西の窓からは美しい中國の山々が見える。みやげ物店で繪葉書など買ふ。しばらくして降りて來て見るとさつきのぢいさんがやはり新聞を讀んでゐる。札をわたすと下駄を出してくれた。姥ガ石とか油壁とかを見て昔のことを忍んでみる。木蔭の道はまだしつとりと黒ずんでゐる。

鐵の門がいくつもある「おの／＼方お通りあれ」「は／＼」と云つゝた昔が思ひ出されて少々をかしくもおくゆかしくも思はれた。もと來た道をたどつて少し行くそしてふりかへつて仰ぎ見る。白壁はくつきりと青葉の中に浮いてゐる。雄大である。然しこれも今日から見れば封建時代の遺物である。何だか皮肉の様な感じがした。

夏の旅

柴田進

釜山を出帆した關釜連絡船德壽丸は、水路を眞南に取つて暮進してゐた褐色に染められた二本の大きな煙突からは、盛に黒煙が立騰つてゐる。空は夏には珍しく曇つてやんわりした白雲が、ほつかり浮んでゐるかと思へば、雲の峰が行手の水平線に、むく／＼と大きくなる。そして青々な海は、四方に涯なく一脉の旅愁を味はしめる。

午前十時五十分、母の見送を受けて船が出發してから僕は荷物の取片付をしてゐた中に、十一時になつた。そこで土産に、もらつた梨にかぶりつきながら、今度夏休を利用して歸

海洋の旅は、案外單調だ。

汽船は唯、大海のうねりを、乗り越して、到着地へと進み聞ゆる物はエンヂンと波の音、視界にあるは、一面の蒼海。

仰いでは、時々刻々、變化して行く日光に過ぎない。

四時頃、對島は、とくに過ぎ、壹岐も後に、行く／＼名にし負ふ方海も、今や盡きんとしてゐる。

と、遙か行手に紫色の霞！雲にあらず。もやにあらず。之は實に故山の影である。私はじつと、眼を見張つた。船は恐しい速力で走つてゐる。遙かな／＼彼方に現はれた島影。島影！！島影！！陸地！！陸地！！

故山は近づいて、につこり笑つた。

日は西に廻つて「明日も天氣か夕日が赤い」波は一面に紅に染められた。僕は夕日を浴びて、デツキを降りて、船首へ歩いて行つた。料理室では、白いエプロンをかけたコックが新鮮な鯛を焼いて居た。水夫が眞赤に照らされて索具を洗つてゐる。僕はてすりに憑つて、水を眺めた。波音は船にあたりと風合して、ものすごい音を發し、船の波の上に、落した蔭は、おそろしいばかりの藍を浮べてゐる。此所に立つた僕は、何とも形容出來ぬ恐怖に襲はれ、思はず、見ざるひせざ

る故郷の事を想像して見た。

「久しぶりだから、お祖父さんも、お祖母さんも、喜ぶだらう。それから今春來た叔父の話では、運河が出來て蒸氣が通つてゐると云つたが、見に行く事にせうか。友達之三ッ川、瀬田、加藤がびつくりするだらう。やあ、さうだ。皆に手紙を……」等と、懐しい内地の様子が、はてしなく、脳裡に描かれる。僕は急いで、カバンから、便箋を出して、走書に四通手紙をかいた。小さな圓形窓から、水の反射光線がさしこんで来る。

三十分程後、ボートデツキに出て見た。見渡せば釜山の彼方は、一面の煙雲、雲峰に蔽れて、今更の如く、「八道の山よいざさらば」の句を、明に解釋するを得た。船内では、もう食事が済んだ。船は「デユン／＼／＼」と、にぶい音を立てつつ、下關として航行を續けてゐる。日は一ぱいに照り映えて、船具の反射は、目が痛く、船室は、むし暑かつたが、甲板には、海風「颯々」として絶えず、加ふるに、テントの設備があるので、相當の出入である。

「デユン／＼／＼」エンヂンの音「ザーツ、ザーツ。」ゆるやかな波足が船測を洗ふ。

るを得なかつた。もうちらほら、漁船が見える。目の前を三丁櫓が通る。恐らく長閑な、船歌を、船頭は、歌つてゐただらうに、一向聞えなかつた。

近くに見える赤涯の小島は、六連島か、竹子島か？

德壽丸は彦島の南端を廻つた。南には鎮西の山々！内地は益々近くなる。

船は、さつきから、スクリウの廻轉を停止した。然し其餘力は三千噸級の大船を、靜に前進せしめてゐる。關門連絡船が寫眞通りの形をして、走つてゐる。停泊中の數汽船は靜に煙をあげてゐる。防波堤はもう過ぎた。

下關のふるぼけた棧橋は、勿論、其の上に、かひ／＼しく立働く船夫の群も、見取られる様になつた。棧橋の左右には赤煉瓦の西洋館が、立ちならんで見える。

上陸準備は出來た。棧橋までは、一二丁。甲板上一ぱいにつめかけた三等船客が、明けはなしの窓から、二等室を、そつとのぞいてゐる。黒山の人に、もまれて、手さげカバンがもげ落ちさうで、汗は、洋服に、にじんで来る。一隅から赤ん坊の泣聲がする。子供を叱りとばしてゐる母親の聲もそれに交つて、一入旅のあはれを思せられる。

日はいよ／＼薄くなつて黒い影が、水に横はつた。兩舷の吐水口から、一齊に迸る熱湯。「ボー」すばらしく大きい汽笛が、雑音を制して「長門の浦」にひびき渡ると同時に、船は靜に棧橋へ横付にけなつた。橋

がかけられるが早い、おすな／＼の乗客は、我先にと上陸した。日はとつぷりくれて、帆船林立する下關港内ではかすかに燈火をつけて、總ての船がねむり出した。

(朝鮮より内地へ)



部 報

劍道部々報

猛將山原並に集治の二兄を送つた我部は、振はざる我が劍道部の名を擧げ、天晴れ武名を歌はれんと紛々として散る山櫻花に包まれ

つゝ鋭尖光花を散らし亂舞を重ね男々しき氣合に士氣を躍らせた。「花は櫻木人は武士」見よ劍道精神に陶然として酔ひたるが如き男の子の叫びを！ 彼等の叫びを聞きて奮はざる者ありや、彼等が亂舞を見て立たざる者ありや。

未だ萬花その艶を説はざる初春の午後、

流汗漉々として我等が膚を流るゝ灼熱の候に我等が誇のあの道場に意氣と力を以て自己の腕の洗練を努めた。かくして茲に新らしく笠井先生を部長にお迎へし内田師範を初め諸先生の熱心なる御指導の下に我等が腕は磨平として磨かれた。果してその腕の冴へを發揮すべき初の舞臺の幕は切つて落された。

長濱青年團主催

縣下中等學校劍道大會出場之記

時は五月雨降りしける五月初旬、必死の意氣で策戦をこらし、愛刀を腰に母校の譽を双肩に擔つて、立つた若き武夫の心中や如何に。前夜の夢は果して何を語るや。

一回戦虎姫中學。虎中何者ぞ、我等が意氣の下には當然屈服すべきものなり。戦は開かれた。お！ 高鳴る胸の響を如何にせん。戦は終れり。我は勝てり。悠々として我は勝てり。何なか言はんこの喜びに！ 天我を恵み給へるや。次回戦は不戦一勝なり。竹刀の響は間斷無し。我は準優勝戦を待つ。

さて準優勝戦は何者とぞ、おゝ彼は斯界の雄八幡商業となり。我何ぞ恐れんや、我強敵を待てるなり。必死！ 捨身！ 之ぞ我等の策戦なり。されど時に利あらず、終に我敗北の身となれり。悲しい哉。悲しい哉。

第 回

全國青年演武大會出場之記

八 商 本 校	國 松 中 川	小 西 山 口	堀 尾 中 田	田 中 中 村	村 西 室 谷
---------	---------	---------	---------	---------	---------

我等が槍舞臺たる武徳殿青年演武大會は數日の後に迫れり。今度こそはと赤き血潮を躍らし、太陽の灼熱をもものこせず、磨きに磨きしこの腕の今發揮せで亦何日の日かあらん。校友會諸兄の盛大なる應援を後に必勝の堅き誓を交はして京都の町に乘込めり。旅館の傍なる熊野神社に優勝を祈り、明日の戦を夢に見つゝ京の一夜は明けはなれたり。今日こそはと裝束引きかへ、武徳殿武者溜に急ぐ。午前八時、一番太鼓は打ちならされた。數千の武者共は一齊に式場に列す。久遠宮殿下より優渥なる御令旨を賜はり二番太鼓共

に個人勝負は開かれた。嗚呼、火花飛散ることの戦！ 誰か禁じんこの武者震を！ 最初に立てるは（我々新進の花形筒井君なり。敵は朝鮮釜山中學、彼打てば我防ぎ、我進めば彼亦引く。攻防おき／＼怠り無し。ハツとする間も遅し、彼我に向つて大上段にふりかぶつた一刀を甲手に、我受ける隙も無く、無慘にも倒る。次に立ちたるは我が中堅の將中村君なり。敵は香川大川中學の雄者、互ひにおしつ防ぎつ、麻の亂れになつて戦ふ。時しも彼我の面を目掛けてサツと打下す。ハツとする間も無く我体を右にかはすや得意の胴に彼を打倒せり。續いてこれ亦その堅實な敵はれたる細野君と岡山高梁中學の猛將の戦なり。我高梁中學何者ぞ一刀の下に得意の甲手で相手を持ち倒す。續いて我が吉村君は立てり。敵は高知工業なり。際どい戦は續く。右に左に彼をさけ我を進める事數分、アツと言ふ間も遠し我彼の胴を一刀の下に、次に我が猛者室谷君と愛知豊橋青年の戦なり。彼我に比し

て遙にまざる体格の所有者なり。されど我よく防ぎよく守り、亦打つ事もしきりなり。戦は續く。彼のするどき眼は我の甲手に常にまゝがる。我よくそれを守りたるに、嗚呼惜しき哉、彼終に我が甲手を打落したり。之に次ぎて立てるは我が新進の雄西川君也、敵松江農業を一打ちに勇氣凜々たり。されど敵のす早き面に我防げど及ばず、悲憤の涙にくれて下る。次は我が武道部に兄弟が籍を置きて盡せし山本弟君なり。敵は和歌山海南の雄、汗を握るか如き戦は續く。我よく打ちたるに及ばざるや、終に彼の甲手に退く。次は暫し時を置きて我が古參の將山口君なり。敵は九州の雄都城商業なり。九州男子何者ぞ。我こそは湖東彦根城下の雄なり。いざ一刀交へんと火花の飛散るが如き戦なり。右に左に体をかはしてすきあらば打込む。さながら京の五條の橋上の牛若辨慶の形なり。されど湖東の雄も力及ばず見事なる敵の甲手に倒る。一日は暮れて明けて二十五日の朝、我が首將中田

君の勝利を最後の望に又も武徳殿に乘込む。彼は山陽の猛將山口縣徳山中學なり。敵に何の不滿あらん。我とても湖國にその武名を歌はれたる猛雄なり。真白の装束に愛刀を持ちてツツと立ち上りたるその形、山陽の雄も其場にひれ伏すばかりなり。さしも廣大なる殿内も我の氣合に震はんばかり、彼面を打たんとすれば我左に身をかはして甲手を打つ、彼甲手を打てば我それを引く間もあらず面を打つ。かくして寸分の隙も無き戦のはげしきよ。されど我等の望も空しく彼の打下せし面に退かざるべからず。かくして個人勝負は不成績にも終れり。唯次の団体仕合を一樓の望にその場を退く。

奏せん。我等の惨影のみ空しく残れり。之返つて我等が勇と努の鼓舞の扶にかならざるべき。

七月武徳殿に敗北の憂き目を見た吾等は、この大會にでも最後の花を飾らん。臨時試験の當日も無理に貴重な時間を割いて、我が愛刀を練磨し、こゝに必死の勇を以て虎中の道場に乘込んだ。當日の成績を左に掲げん。

鳥取商業		本校
松	尾	細野
山	本	室谷
井	關	中村
岡	本	山口
小	谷	中田

縣下中等學校武道大會出場之記

第一回戰

本校	膳所中學
○細野	——芝原
吉村	——吉丸

室谷	——三上
○中村	——蒲生
山口	——小西

第二回戰

本校	長濱農學
○細野	——堤
吉村	——福永
○室谷	——白崎
○中村	——島原
山口	——小野

第三回戰

本校	彦根工業
細野	——吉田
吉村	——阿部
室谷	——浮氣
中村	——高谷
山口	——東城

第四回戰

本校	今津中學
細野	——川島

吉村	——岡本
○室谷	——鹿島
○中村	——橋本
○山口	——山本

我軍奮闘の效無くこゝに遂に破る。残念の極である。

縣下中等學校青年
演武大會出場之記

七日武徳殿に於て悲惨な不覺を如實に見せ付けられた我等は、この慘憺たる敗北を再び繰返すべきやと、試験の當日も貴重なる時間を練習に費せり。然れども悲しいと言はんか主將中田君は事故の爲到底出演不可能なり。殘輩は未だ経験少なき若輩共、さて之を以て出演すとも果して月桂冠を得べきや、死して後やむ武士の道に我等は慰安を覚え、悲痛なる覺悟と信念を以て湖北虎中の道場に急げり幸に一戸大將閣下の臨場の榮を辱けなくし湖

國の武士に一段の榮譽を與へらる。かくして光榮の御前仕合は開かれた。我等が第一回戰は湖商の將膳中との戦に開かる。我軍経験未だ淺き若軍なれど、果して之あなどり難きにか、三點を獲得して好成績なり。第二回戰は長濱農學なり。我軍必死の意氣込にて戦ふ。然れども敵は中々の猛雄なり。容易の業に非ず、我終に彼に三點を與へて退く。第三回戰敵は今日の優勝候補の一たる彦工なり。我に一分の勝算も無し。我軍捨身にて食つてかゝる。終に我に利非ずして總點を彼に與ふるの不覺を取る。我軍の意氣消沈せんとするを第四回戰には……と相慰めすかして退く。第四回戰は今中との戦なり。我弱軍と雖も何ぞ今中に劣らん。最後の努力も報いられて、三點を獲得せり。嗚呼かくして今日の戦は終れり何ぞその戦跡の貧弱なる、我等の努力の足らざりしか、時運の非なりしか、我等校友會員諸凡に對して何の言を有する。唯我等の重なる不覺を許し給へ。

部報

重なる不覺に我第に如何にして之を取戻さ

ばやと勇氣百倍、勇氣千倍にして連日腕の練磨に努む。かくして本年最後大會高商主催の武道大會に出演す。我等が責任たるや重且大なり。誰かよく我等が意中を察せんや。嗚呼されど、神の恵我等には非ざるか。一回戦に優勝校（最後に優勝した）京一商と取組みたり。我弱敵を望まず、敵としては申し分無きなり。必死、必死、捨身、捨身、我等はこれをモットーに敵軍に打つて當る。その意氣のすざましき。鬼神もその意中を察して泣かざるべき。打つわゝ當るわゝ我と我が身に非ざること。之ぞ我に神の宿りたるならん強敵も少々ひるむ形なり。嗚呼惜しき哉。この意氣と力にはわずかの報も無く、敵の中堅に我軍は全部たはざる。我が事盡きたり。我今年の我等が戦跡を回顧してその餘りに貧弱

なるまいか。で、よくなげかざらん。許せ、校友會諸兄よ。我等が力の足らざりしを。

十一月十三日、我が校永久の誇であり名譽とする大正天皇行啓を紀念せんが爲例年の通り當日一日を費して、校内武道大會を開催す。彦商彦工を初め、揚武、東西両小學校の選手の出場を得た事を深く感謝す。今年は例年の例を破つて謝堂に於て之を行へり。左に當日の成績を述べん。

(紅軍)

(白軍)

○北	○河	○同	○林	○加	○上	○登
川	西			藤	野	本
丨	×	丨	丨	丨	丨	丨
松	同	西	同	同	同	北
浦		田				野
	○			○	○	○

眞	北	同	山	郡	同	同	同	同	同	同	小	小	新	富	北	佐	若	高	同
田	川		本	田							野	野	谷	士	村	藤	林	橋	
同	同	大	同	西	×	川	後	三	越	田	小	同	藤	同	同	同	同	同	櫻
同	同	平	同	川		部	藤	山	智	(文)	篠		村						木

100

[illegible]

○	上	辻	吉	德	小	同	牧	今	北	同	中	同	加	上	同	同	同	同	同	同	同	同
	田		原	田	路		野	村	川		島		藤	松								
									X													
同	同	同	同	同	西	同	同	宮	小	同	北	同	同	有	門	室	北	久	綾			
					崎			川	堀		川			元	川	谷	村	木	戸			

同	○松	同	○同	小	吉	同	○高	小	同	○同	○同	○中	松	名	同	○同	○同	○同	○同
本			川	本		原	管					村	田	畑					
		×			×														
近	越	日	前	門	同	宮	同	同	辰	北	馬	同	同	同	木	木	土	川	山
藤	智	比	川	野		下			見	村	場				下	村	田	村	内
○						○		○	○				○	○	○				

○同	○榎	久米(孝)	○同	○木	山	吉	寺	向	松	前	若	小	原	○同	○一	○同	○同	○同	
	木			村	本	田	田	井	宮	田	林	林	田		園				
種	同	同	吉	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	西川(義)	若	同	林	松	
村		○	村			○	○	○	○	○	○	○	○	○	林		田	本	河

	上田(英)	林(治)	同	○久馬	辻(達)	馬場	同	○同	○吉原	高橋	辻(三)	郡田	井上	同	○小堀	同	○同	○椋田	同
						X													X
同	同	池田(虎)	同	同	岡	福井	西村	濱村	同	同	同	同	同	舟橋	同	藤原	元持	堀江	粕谷
	○	○		○	野○					○	○	○	○	橋○		○			

○同	前川(三)
同	岸田○
○前川(メ)	同
○同	副將北村
同	大將中川(ゴツキ)
副將西堀(ド)	同
大將正田	同 ○
他校選手對本校用徒任合成績	
東小學校兒童	本校生徒
○上坂	小篠
○宮田	山本
○百田	有光
○寺島	那須
松田	中島○
西小學校兒童	本校生徒
○井口	鹽谷
前川	久木○
○奥村	上林
滿島	竹中○
本多×橋本	

中等學校選手三本仕合成績

(彦工)◎中	村	——	西川(本校)
(彦商)○若	林	——	簡井(同)◎
(彦商)○脇	田	——	川村(同)◎
(彦工)○淨	氣	——	中村(同)◎
(彦商)○多	河	——	吉村(同)◎
(彦工)◎佐々木	——	——	山本(同)
(彦商)○渡	邊	——	室谷(同)◎
(彦商)○小	管	——	中田實(同)◎
(彦工)◎吉	田	——	山口(本校)◎
(彦工)○阿	部	×	細野(本校)◎

(山口記)

柔道部々報

部員曾我繁三記

昭和三年七月下旬 全國青年演武大會出場之記

黃金時代建設を夢みつゝ赫灼たる炎暑も何
のその、金龜城頭に涙と汗との猛練習、今年

合戦物語に各々打ち興じつゝ翌日の團體試合の手順なきめ、夫と思ひ／＼に散歩に出掛けたり。

二十九日團體試合成績

大將	副將		先鋒		本校	
田部	曾我	吉川	山口	横田		
直成	繁三	長彦	隆一	廉一		
	×		×			
○伊勢村喜一	菅沼	○中村篤二		○西村眞一		京都一商
	達					

眞に吾々は最後までアーミイ、スピリットを發揮し奮戦せしも、敵は京洛に名ある京都一商、巧に吾々の奮迅する内を逃げ、機に乗じて巨彈をあびせかけ、無念ながら敵に名をなさしむ。

昭和三年
十月七日
縣下中等學校柔道
大會出場之記

黄金時代建設もあはれ耶郿の夢幻になりはてんとす。此處に部員緊樺一番、時正に之れ

104

こそはとの一念に、部員の必死的練習に日の暮るるを知らざる事幾度ぞ!!

愈々吾等最初の戦場たるべき京都武徳殿に遠征し、全國に彦中赤鬼の勝鬨あげんものをも、多數の愛校諸君に見送られ懐しの金龜城としばしの別離をかはしむ。

二十八日個人試各成績

西	18	京都福知山中學	○森下 津田元次郎殿
西	19	愛知明倫中學	○重松 横田信助廉一
西	134	宮崎延岡中學	○糸井 前川伊太郎義作
西	294	山梨都留中學	○瀧口 山口隆一増雄
東	299	富山富岡商業	○大寺 吉川榮作長彦
西	456	和歌山新宮中學	○鍋割 曾我繁三米吉
東	468	德島高岡中學	○天野 田部直成貞美

個人勝負の結果、實に豫想外の好成绩にて、同意氣昂然として引上げ、宿舍にて今日の

個人勝負の結果、實に豫想外の好成績にて
一同意氣昂然として引上げ、宿舎にて今日の

網羅せし奥雄十有六校、いづれも當日の覇者
だらうんば死すとも歸らじと語らずさも意面
に表はれたり。やがて一戸大將、縣知事、各
學校長臨席の下に、審判長範士田畑七段以下
審判員多數の眞摯なる審判に依り試合は開催
せられぬ。次に當日の戦績を擧げん。

第一回戰

本校 長濱農學
山口 × 豊原
横田 × 福永
大竹 × 川崎
曾我 ○ 杉本
田部 × 中山

第二回戰

田	曾	大	横	山	本
部	我	竹	田	口	校
×		×	×	×	
大	○初	藤	西	中	大津商業
島	田	野	井	野	

部 報

第三回戦

本校 伊香農學

山口 × 竹内

横田 × 高橋

大竹 × 武本

曾我 ○ 坂本

田部 × 古川

第四回戦

本校 大商

山口 × 中野

横田 × 西井

大竹 ○ 藤野

曾我 × 初田

田部 × 大島

準優勝戦

本校 師範

山口 × 脇坂純教

横田 × 脇健治郎

大竹 ○ 平木弘

曾我 × 豊田實次

田部 直成 ○川村忠右門
優勝戦
滋賀師範——○栗太農學

この成績にて満足する能はずいへ共、從來よりの吾校の戦跡に較べて更に一進歩を示せしを觀れば、あの土用の眞摯なる練習の無意味にあらざるを思ひ、自ら微笑の禁じ難きものあり。

今本誌を借りて在來生徒諸君並に吾愛好する少壯柔道部選士諸君に告ぐ。我校生徒諸君は余りにも自己本位だ。悪く言へば利己主義者だ。己一個を犠牲にして學校の爲に微腕をつくらずの誠意がない。何事にも消極的だ。

諸君がそれで満足し得るならそれまでだ——が諸君には名譽の念がないであらうか？否と私は斷言する。諸君はそれを欲し且求めんとしてゐるのだ。併し今の彦中は眠つてゐる確に眠つてゐる。私はこれを休息と名付けた。休息は永久的のものでない。活動力の根柢だ。エネルギーだ。やがて勉學運動兩方面

に發展活動のあるの間もないだらう。選手は諸君のものだ。己一個のものでない。そのものを遇するは當然だ。兎も角諸君は目醒めてもらひたい。緊揮一奮努めてもらひたい。次に吾部諸君、特に今の三年生に大なる期待をかけてゐる先生も居られるのだ。他部に負けない丈の決心で勉めて止む事なからんには必ず吾々以上の勝利を得る事は難くない。黒帯が目標でない。これ以上に諸君の期待すべきものはあるのだ。實力あるものは黒帯を恐れない筈だ。よりよき彦中柔道部の歴史を飾るべく必死的、一時的でない永久的の奮勵あらん事を。 昭三、十、二十三朝

端艇部々報

(尾本記)

部長 原田先生
理事 上本先生

長濱農學水上大會出場之記

七月五日、此の日、天氣晴穩にして波靜なり。我等は本年度に於ける試合の手ならしを目的として、湖北長濱の地に向ひぬ。會場に時の到るを待つ。所定の午後一時となるも未だ我等の敵たる、他中等學校選手の來るを見ず。致し方無く獨漕する事となり。我等の失望云ふばかりなし。練習の意味を以て、悠然と千百米突のコースを引き、觀衆の果然たる中に、靜かに會場をひき上げぬ。歸途、長濱の某寫眞館にて記念寫眞を撮りぬ。因に本大會本漕選手左の如し。

舵手 尾本市平
整調 清水伍位太
五番 西田惇
四番 森野壽
三番 大竹徹治
二番 榎本新太郎
一番 澤田政義

本校創立紀念日校友會端艇部大會之記

例年の如く五月一日、創立紀念日校友會端艇部大會は彦根港灣に於て開かるゝ事となれり。此の日天候惡しく、前日の薄雲は當日の朝にみりても未だ散らざりき。然れども此の密雲の下に開會の式は擧げられたり。午前九時頃、果して霽々たる雨は城下の水面を亂しぬ。されど此の雨中に於ても大會は中止されず、元氣に満ち／＼たる若人の叫びは、終日水上に響きぬ。職員諸先生も元氣に出漕せら

次ぞ石場ヶ濱に於ける全國大會も後約一ヶ月に迫りたる事なれば、我等は實に血の出る如き猛練習を續けたり。先輩諸氏の鞭撻指導は全く尋常ならざりき。然れ共、時日の不足を如何ともする能はず、焦燥の念禁すべからず。よつて部長理事の先生及諸先輩との協議の決果、中休暇早々合宿なす事となれり。かくて、七月十九日より約十日間、彦根片原松盛館に於て合宿す。廿四日までの通學は、ムよりし、朝まだきより起き出でて、朝練習に、磯山岬まで漕ぎ出で、直ちに引き返して二本漕、力漕等を以て、その日の腕馴らしをなし、艇を艇庫にたためて、程遠からぬ合宿所に朝食を済まし、學校に驅せ向ひ、放課後は直ちに又猛練習に時を忘れ、餓を忘れて餘念なし。夜は、バツク臺、ストラップの引合ひ等をなして寝に着く。

廿四日より休暇となり従つてプログラムを變更し、終日技を練り体を養ひ、来る日の準備につため、殆んど雨の日も及ぶがりの練習

習を積みぬ。

遠漕之記

七月廿七日、議一決し、未明より遠漕の壯途に上りぬ。理事上木先生及びマネジャー森氏同乗の上、一途に海洋を指して進む。此の日、天は曇りたれど湖面靜かにして、絶好の遠漕日和なりき。十分、二十分、四十分とロングを續け、午前十時頃に到れば、多景島ははるか左後方にかすみ、竹生島の右舷近く迫るを見る。四圍茫漠たり。これより或はロングを引き、或は二本漕きに漕法を確めつゝ午前十一時半、恙なく海洋につく。午後に至り、折からの東風に彼は白頭を立てしか、我が漕手の意氣未だ衰へず、約二時間練習の後、宿に來りて寝につく。さて第二日(廿八日)未明より海洋を發し、目的地小松に急ぐ此の日も湖上靜かにして、天には一點の雲なく晴れ渡りぬ。二十分ロングを引きたる後、しばし四圍のながめに英氣を養ひて、一時間

のロングを引く。この時の漕手の努力、苦痛實に察するに余りあり。波頗る穩かに、風死して、日は赫々と照りつくれば所謂油照りにて、我等の最も苦痛とする天候なり。その後尙属せず、二十分、四十分と力漕を重ね、やうやくにして小松は我が眼前に展開されぬ。時に午後一時。我等は所謂近江舞子さうたわれたる、白砂青松の美觀に、疲勞を忘れてしばし見されぬ。あけて白砂を踏みて宿に至る。此の日は選手の疲勞その極に達せしかば、早くより寝につきて熟睡し、翌日の奮闘に備ふ。明くれば廿九日、太陽の山の端を出ると共に艇は白砂を離れ、連る青松に別れを告げ、勇しく歸彦の途につきぬ。此の日は、風強くして波高く、遠漕には困難なるコンデションなりき。然れども何物か我が選手の意氣に抗するを得ん。荒波と戦ひ、沖ノ島の邊に來たれば、波すてにやム靜まりぬ。日は前日と同じく焼くばかりに照りつけた。漕手は非常に疲勞したるも努力につぐに努力を以てし互

にはげましつゝ、オールをにぎりしめたる様

は實に涙ぐまじきばかりなり。正午頃、無年彦根につき、その日は松盛館にて疲勞を休めぬ。

かくて我等の自信、いよ／＼堅く、戦の日は、日、一日と迫りぬ。七月卅一日、一先づ合宿所を引拂ひて歸宅し、一日の午後より、我が梅無臺たる大津に向ふ事となれり。

全國中等學校石場ヶ濱優勝漕大會出場之記

昨年第二回戦に於て惜敗したる残念さ、無念さをとても忘ることも忘れざりし我等は、「今年こそは!!」と意氣すでに大津の雲を風靡せるが如くにして、八月一日午後、佃亭合宿所に入る。大會當日迄の約四日間、合宿所に於て、マネジャー森氏の指導の下に、猛練習に、作戦に餘念なし。すでにして、敵と爲すは唯、米子、長農の二校をおいて他無きを知りたる我等は、或は食事の間も、或は休憩にも「長農何ぞ!!」「積年の仇敵米子を例せ!!」

と絶叫し、赤銅よりも黒き腕をたゞきて、たゞひたすらに當日の壯觀を偲び、一日千秋の思ひなりき。

八月三日午後、我が第二選手、恰も團を擧ぐるか如き勢を以て來津せり。我等の意氣益々上りぬ。

かくて八月四日、例年の如く、出場選手の懇親會、市公會堂に行はる。當日折悪しく、恰も翌日の戦雲を豫想せしむるが如き風雨なり。雨の爲に選手の疲勞せんことを恐れで、原田部長、上木理事、岡先生、森マネジャー及び第一、第二舵手の五名、代理を以て出席す。滋賀縣知事、大津市長及び會長の所感を述べられし後、委員の競漕に關する注意ありて、番組抽籤行はる。我等は以前より、米子長農を敵として覺悟したるものなれば、他の敵には目もくれざりき。しばらくして我が敵は定まれり。

第七回

今治中學 一コース 赤

今津中學 二コース 白

彦根中學 三コース 青

斯くて合宿所に歸り、森氏及び一同と共に熱議策戦をこらす。「弱者と見て侮らず、強敵と見て恐れず」をモットーとして、堅く／＼必勝を誓ひたり。

明くれば八月五日、前日來の雨未だやまず。大會の行はるゝや否やを本部に問ひ合せし所天候の都合上やむを得ず、明日に延期と決定せし事を知り、一同や失望の体なりしが、雨の漸次小降りとなるに従ひ「満を持して放たず」を叫び、意氣益々昂りぬ。バツク臺練習、ストラップの引き合ひ等々、我は此の漕手の熱心と苦心とな、まざ／＼と見し時、感謝の涙にむせびしなり。

偕て、翌六日とはなりぬ。湖西早くも戦風にうそぶきて、荒々しくも亂れたり。風はコースの逆方向より來りて、戦のいよ／＼困難なるを思はしむ。八時三十分、開會の式あり優勝旗返還式を終りて、直ちに第一戦戦に入